弘前大学教育学部紀要　第122号：９～21（2019年10月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 122：９～21（Oct. 2019）

廃名『莫須有先生伝』訳稿（二）

Fei Ming's Moxuyouxiansheng zhuan：A Transportation（２）

張　雪　晶*・山田　史生**
Xuejing ZHANG*・Fumio YAMADA**

要　旨
廃名（1901～1967）の前衛的小説「莫須有先生伝」の翻訳。『廃名集』第2巻（北京大学出版社）所収に拠る。

キーワード：廃名　莫須有先生

第三章　花園でのめぐりあい

山暮らしにおける歳月のながれは俗世間のそれとはちがっているし、おまけにこの『莫須有先生伝』は信ずるに足る歴史書というわけでもなくて、その多くはというかほとんど全部はぼくが莫須有先生の日記から抜き書きしたものなのであって、おまけにそのいかがわしい日記ときたら、日にちは書いてあっても年月は書いてないとか、日にちさえも書いてないとか、めくってもめくってもおなじ番号がつづいていたりとかいったふうで、そういうわけでこの『莫須有先生伝』にあっては四季のうつりかわりは順序にしたがっていないし、なにもかもゆきあたりバッタリ、そういうふうに書いてあればそういうふうに書いてあるとおりなのである。

なにはさておきまずはじめに「莫須有先生の家主の奥さん」についてどうしても紹介しておかなきゃならないんだけど、そうすることは莫須有先生について語ることよりも価値がひくいということはけっしてなくて、というかもし莫須有先生の家主の奥さんがいなかったら、この『莫須有先生伝』もなかったにちがいない。莫須有先生はもちろん実在するわけだけど、その伝記を書くのはひょっとするとぼくじゃなかったかもしれない。莫須有先生と莫須有先生の家主の奥さんとのであいはまったく偶然といってよく、それはとある公園のなかでのことなんだけど、莫須有先生はぶらぶらと散歩をしていて、なにげなく公園にはいってゆくと、そこの四百五十本くらいはえているアンズの木のしたでくつろぎながら、あたりをみまわしてからつぶやいた。

「あそこのバアさん、しゃがみこんでなにをしてるのかな？　ひょっとしてオシッコをしているんだとしたら、おそろしく行儀がわるいし、こんなにうつくしいアンズの林であるからには、なにがなんでもおだやかな雰囲気をまもるべきであって、いかにも人間くさい事情でかきみだすなんてことはしちゃいけなくて、ましてオシッコなんていう下品なふるまいはもってのほか、なんていうふうにバアさんにいったりすると、吾輩のポリシーに反することになるし、そもそもそんなことを口にするのも不愉快なわけで、はなから気にしなきゃよかったな。とはいえ文章をつづるという段になれば、どうしたっていろいろ用心しなきゃならんことはいうまでもないが、どうにもこうにもうまく書けなくて、ついつい口からでまかせを書きちらしてしまって、でもってだれかその原稿を待っているひとが印刷のほうにまわして、なんとなく適当にとりあつかい、よいところもわるいところもバレバレになってしまったところで、どうせその程度のことでしかないわけで、むかしのひとのいう一寸の光陰軽んずべからずという考えかたに合おうが合うまいがどうでもよかったりする。そうはいってもいくらだれにもみられていないからといって行儀のわるいことはしちゃいけないし、なにがいけないって、げんに生きているっていうことにたいして申しわけない。まして歳をとればとるほど、よけい注意せにゃならんわけで」

「おい、そこの学生さん、なにをぶつくさいってるん

＊　弘前大学大学院教育学研究科
＊＊弘前大学教育学部国語教育講座

だい？　この歳にもなればひとにみられることなんざヘイチャラなのさ！」

とかなんとか口ではいいながら、オシッコをしていたバアさんは耳たぶまで真っ赤になっていて、恥ずかしさのあまり怒りだしたところをみると、どうやらすこぶるメンツを重んずるひとのようである。もし「うちのひと」のことを愛しているんでなければ、それに食い扶持をかせぐためでなければ、たとい飢え死にしようとも、けっしてこんな「まるで物乞いみたいなみっともないマネ」はしないとバアさんはいうのであるが、このバアさんはひとのかわりにものごとを決めることが好きで、とりわけ莫須有先生のかわりに決めてやることが大好きなのである。というふうに書いたことについてはいくつか注釈をつけておかねばなるまい。その一、「うちのひと」っていうのは、それはバアさんのご亭主のことで、はじめて莫須有先生にひきあわせたときのことだけど、あっさりと一言だけ「莫須有先生、うちのひとはなんの役にもたたないひとさ」とだけ紹介したのであった。莫須有先生はヘドモドしてなんと返事をすればよいのかわからなくなり、だれのことをいっているのかもわからなくなってしまったくらいだったのだが、頭のよいバアさんはそのことがすぐにピンときたらしく、そのやつれきった顔にはまだお嬢さまだったころの面影がのこっており、歳はとうに五十をこえていてもまだ羞じらいをただよわせており、どうしても莫須有先生にわかってもらいたいらしく、「あたしはあのひとの女房の黄氏だよ」と指さしながらいうのである。そのひとは庭の片隅にたたずんでいた。莫須有先生はうやうやしくお辞儀をした。その二、たとい飢え死にしようとも物乞いみたいなみっともないマネはしないというのは、バアさんが公園のなかにすわってラクダ草をひっこぬいているということでわかる。ラクダ草というのはラクダが食べる草のことだが、ところでわれわれの同人誌にどうしてラクダ草という名をつけたかというと、それなりに理由がないでもないにせよ、それはまったくぼくの手柄というわけではなく、ある才気あふれた友だちのおかげであって、ぼくはただ坐禅よろしくだまってすわりながら田舎ではラクダ草をむしるということがあるらしいっていうことをみとめただけにすぎないのである。ここに暮らすひとにとってラクダ草をむしることは共同でおこなう生計のすべであって、ラクダ草が百斤で銅貨四十枚になる。ラクダ草を百斤というけれども、じっさいバアさんの背中には百二十斤はのっけなきゃならない。莫須有先生の家主の奥さんはというとせいぜい五十斤をかつぐのがやっとであり、それをやるだけで半日がつぶれてしまうのである。バアさんはいつものように隣人である「薄っぺらな奥さん」といっしょに背中にそれぞれ重いものをかついで石炭屋にゆくのだが、その石炭屋は五頭のラクダを飼っていて、それはそうとこの薄っぺらな奥さんについて語ろうとすると非常にながくなるので、それはまたの機会にくわしく説明するとして、ひとまず忘れないでいていただきさえすればよい。この薄っぺらな奥さんはしばしばバアさんのことを地べたにへたりこんで起ちあがれないところにまで追いこむのだが、あるときひとりの「学生」がバアさんが地べたにすわって泣いているのをみつけ、すぐさま莫須有先生にご注進におよんだことであった。薄っぺらな奥さんはラクダ草をちゃっかり売りさばき、銅貨六十枚をせしめて帰宅しようとしており、莫須有先生の家主の奥さんのほうはというと十八枚、せいぜい二十枚であって、薄っぺらな奥さんはでっかい口をおっぴろげてでっかい声でわめきながらでっかい歩幅であるくもんだから、いっしょのバアさんは「おさきにどうぞ、あたしゃひと休みさせてもらって、よっこらしょ」というのが精一杯。薄っぺらな奥さんはさっさと遠くにいってしまったので、よっこらしょという疲れきった声はだれの耳にもとどかない。薄っぺらな奥さんはラクダ草をかついで石炭屋にはいってゆくと、長椅子に尻をどっかとおろし、ブタみたいにでっかいオッパイが丸見えなのも気にせず、「さっさとはかりをもってきて、あたしのラクダ草をはかっておくれ」とでっかい声でわめく。莫須有先生の家主の奥さんはプイとそっぽをむき、じっさい目にするのもイヤというふうに、「なんとまあみっともない！　いい歳をしたおばさんだっていうのに！」と年配の女のすることじゃないわよとたしなめる。このバアさんはたしかに細かいことを気にしすぎるきらいはあるけれども、さすがの石炭屋の店主でさえも「あんたにだけうまい汁をすわせはしないよ、なにせはかりは公平だからね」という。この土地にはひとつの警句があって、それは「石炭をかつぐ」というものなのだが、すなわち年寄りにナメられないという意味である。石炭屋の店主たるものそれなりにいっぱしの人物なのである。薄っぺらな奥さんはちっともノドがかわいていなくて、というのもさっき道ばたにあった天秤棒で水をはこぶための桶のなかに顔をつっこんで牛のようにグビグビと飲んだからで、それをみた隣人であるバアさんは「いくらお金があったってあんな水を買いっこないさ！」と腹のなかでおもっ

たが、とはいえラクダ草をおろして石炭屋の店先にすわったバアさんはひどくノドがかわいていて、じつはお茶が飲みたかった。バアさんのうちでは、腹をすかせて死にそうになることよりも、お茶を飲めないことのほうがうんと遺憾なことなんだけど、そういえばもうずいぶんうまいお茶とはご無沙汰しているねえ。「店主さん、あたしの草もはかっておくれ」とバアさんがのんびりした口調でいうと、店主はバアさんの草をはかってやる。ちなみにバアさんのいちばんの好物といえば買いものをすることなのだが、とりわけはかりでもって目方をはかることには目がなくて、たった一斤のホウレンソウを買うときであろうとも、みずから目方をはからずにはおれないもんだから、売るほうでもバアさんには売りたくなくて、バアさんのうちのまえでは売り声ひとつたてずに素通りするもんだから、亭主が帰ってくるや否や「あんな野菜売りまであたしたちをバカにするんだよ！」と泣きわめくのだが、このたびはバアさんのほうがものを売るのであって、いったいバアさんはものを売るときはいつだって気前がよすぎるのであって、たとえばバアさんのうちには先祖代々つたわる一対の銅の仏像があったんだけど、それをチンドン屋に売ったときなんか、チンドン屋はお茶を一杯よばれているあいだ、さんざんご機嫌をとってしゃべりまくったもんで、バアさんは銅銭百二十枚ぽっきりで仏像をチンドン屋にくれてやり、あとで亭主にさんざん叱られてしまい、その亭主はうちから三里はなれたところではたらいており、給金は月にたったの八元、おまけにその支払いすらもとどこおりがちときていて、この亭主はこと金銭にかんしてはバアさんよりもシビアだから、ご先祖さまからあずかった仏像をチンドン屋に売るとはけしからんとバアさんを責め、さらには「もし市街地にもってゆき、それを外国人に売ったら、いくらになるかわかってるのかい？」となじったもんだから、バアさんは腰が痛いといったっきり、丸二日というものご飯がノドをとおらなかった。いまはラクダ草を売ろうとしているわけで、これを親戚や友人にみられたら恥ずかしいという気もするけど、ひどく疲れているし、おまけにノドもかわいており、とても立っておれないくらいで、とはいえものを売るからにはだれかに売らねばならないし、だれかに売らねばならないからには売りつくして帰らねばならないにもかかわらず、はたしていくらくらいの値がつくのかということにかんして、このときバアさんはちっとも気にしていなくて、だから背中にかついだラクダ草がいったい何斤あるのかっていうことにもさほど頓着しておらず、石炭屋の店主に「バアさん、今日のあんたのは四十一斤だね」といわれれば、あっさり四十一斤でうなづくのである。四十一斤で銅貨十七枚をもらい、手のうえのそれをながめて「なんでまた今日のはちっちゃな銅貨なんだい？」「バアさん、ちょっと多めにくれてやったんで、ほかのやつだったら十六枚しかやらんところさ」ちっちゃな銅貨はわれらが莫須有先生の家主の奥さんのこころをいたく傷つけたようで、起ちあがるに起ちあがれなくなってしまい、「やれやれ、まるで物乞いあつかいだよ」といいながら起ちあがって店をでてゆくと、お焼きをひとつ買い、どうやら家にもってかえって食べるつもりらしい。バアさんはつねづね「いったいひとはなにゆえにものを食わねばならんのか？　ものを食わなんだらなにかいけないことでもあるのか？」といっている。バアさんによれば自分はそもそも食うのがすくないのだが、そこへゆくと亭主はひどい大食らいで、バアさんはそのかわりただお茶をやたらとガブ飲みするっていうだけなのである。ここまでの説明でいろんなことがだいたいハッキリしたとおもうのだが、ところで莫須有先生はというと四百五十本のアンズの木のしたですわっていたのでノドがかわいてきたのだが、さりとて木登りはしたくなくて、頭上にたわわになっているアンズの実がうまい具合ににかれの口のなかに落っこちてきてくれることを願っており、「おやおや、残念ながら吾輩の口はおちょぼ口じゃないけれども、あれはすばらしく美味にちがいない」といいおわらないうちに、莫須有先生がえらくビックリさせられたのは

「莫須有先生、あのアンズを食べようなんておもっちゃいけないよ、なにせ苦いったらないから、おもうだけムダってもんさ」

「あなたはさっき吾輩にたっぷりお説教を食らったおバアさんでしょ？　ひょっとして自分のやらかしたことを吾輩のせいにしたいの？　まさか仕返しをするつもりだったりして？　それになんで吾輩のことを莫須有先生だって知っているの？　ひょっとするとこの文章を書いているやつのしわざで、なるほどやっこさんはわれわれの間柄をよくわかっているから、あらかじめ吾輩の名前をあなたに教えたんだね」

「莫須有先生、あたしはあそこにしゃがんで半日もあんたをながめていたわけで、それは失礼にはちがいないけど、あんたはうちの長男の学生とおなじくらいの年格好、それに顔かたちもそっくりなんだよ」

「いやいや、まさか、吾輩は南のひと、あなたは北の

ひと、似るはずがないけど、まあたしかに吾輩はひろびろとした野原のような心意気をもってはいるんだけどさ」

「ああ、うちの死んだふたりの息子についてはなんにもいいたくないが、うちの長男がもし生きていてくれれば、きっと莫須有先生といっしょくらいの背丈になってるはずだよ。ちょうど満十歳になったときに亡くなっちまって、のこされたあたしたち老夫婦はいまだに苦しんでいるのさ。その日のことだけどラクダ草を売りおわってうちに帰ろうとおもったら、途中で歩けなくなっちまって、道ばたにしゃがんで休んでいたら、なんだが泣きたくなってきてさ、そのときカバンをかかえて家に帰ろうとする小学生があらわれたかとおもうと、あたしのほうをジッとみつめていてね、それがまあうちの銀ちゃんじゃないの。うちの銀ちゃんはよそんちの子とはちがっていて、そりゃあもうガンバり屋だと先生にホメられたもんさ」

「おバアさん、そういう話をされても困るのであって、というのも吾輩はまるっきり主義主張というものをもちあわせない人間なんだよね。だからあなたのかかえている事情についてなんにも意見をいうことができない。莫須有先生という人物についてなら、そりゃあもうなにからなにまで知りつくしているんだけど、吾輩はいわゆる厭世主義者であって、この世のなかの貧乏人であろうが金持ちであろうが、苦しんでいるひとであろうが楽しんでいるひとであろうが、たとい吾輩がすこぶる賛美してやまない美女であろうともどうでもよくて、もし閻魔大王が吾輩にクジをひかせて、ふたたび生まれかわらせてやろうといったところで、どんなクジをひこうが吾輩にとってはどうでもよいことなんだよね。ただし吾輩はおのれの運命はおのれで背負いたいほうであって、その意味ではいささかワガママといってもよくって、吾輩はおのれの人生にあっては皇帝でありたいわけなのですよ。あ、おバアさん、ごめんごめん、つい調子にのって我を忘れてしまい、すっかり自分のことばかりしゃべっちゃって、まったく浅はかもいいところでしたね。あなたにむかって運命についてしゃべくるなんて、こういうのが吾輩のわるいところだ」

　バアさんはもっぱら「皇帝」という二文字だけを耳にいれて、溜息をつく。

「はあ、皇帝ねえ、とうに追いはらわれちまって、かわいそうに、あんたらのお仲間の馮とかいうひとに追っぱらわれたらしいけど、ここいらのひとはみんなその馮とやらを恨んでいるのさ」

「吾輩の姓は馮じゃないけど、たぶん満州族なんじゃないかな」

「そいつが満州族だったらどうだっていうの？　あたしはあんたたち漢族のいでたちのほうをむしろダサいとおもうよ！　すごく素敵じゃない、あの纏足ってやつ！」

「吾輩はあなたとケンカをするつもりはないし、それにあなたのいうことは正しい。ひとつおたずねしたいのは、あなたはさっき吾輩をビックリさせるようなことを、つまり「莫須有先生、あのアンズを食べようなんておもっちゃいけないよ」ということをいったけど、モグラは川で水を飲んでも、ちいさな腹がいっぱいになればもうそれ以上は飲まないのにくらべて[1]、吾輩が好んで飲むのは長江や大海なわけであって、どうせ花を愛でるなら森林のほうがよいというふうに、というのもなんてったって森林のなかにたたずんでいるとその広大さが感じられるからね」

　そういいながら莫須有先生はまた木のてっぺんをみあげ、頭上になっているアンズの実がうまい具合にに口のなかに落っこちてきてくれるのを願っている。

「莫須有先生、その話はもうやめておくとして、ここはもともと馬に乗って弓を射るための場所で、皇帝が追っぱらわれてから、果樹園につくりかえられ、いろんな樹木が植えられたんだが、なんとかっていう町の役所の管轄になっているらしくて、その役所から派遣された名前もよくわからん管理人がおって、そいつがあたしたち田舎者をネチネチといじめて、もしリンゴ一個でもとって食べようもんなら、そいつは「ドロボウ」ときめつけて、町の役所にしょっぴいてゆこうとするんだけど、あたしたちとしてはドロボウよばわりはゴメンこうむりたいのさ」

「あなたたち年寄りってのはとことん現実主義だから、すぐに現実にむすびつけてものごとを考えたがるけど、いちいちそんなふうにしなくてもよいとおもうよ。吾輩にいわせればあなたはいっぱしの道徳家であり、それなりに反骨精神もそなえていて、吾輩はなかなかそんなふうには考えられないわけで、たしかに果実をとったくらいでドロボウよばわりはひどいが、そこには言葉ではいいあらわせない仔細もあるんだろうから、とはいえ一口かじるだけでっていうのはどうかとおもうけどね。いにしえの王朝に東方朔っていう子どもがいたの知ってる？　この子が西王母の果樹園にしのびこみ、ひどくズルがしこくふるまったことについて、吾輩はそれを芝居にしたいとおもっていて、それが上演される暁にはかならずご招待いたしましょ

う」
「あたしは町のほうに親戚がいて、しょっちゅう往き来しているから、ちょくちょく映画をみたりもするんだけど、あたしゃあんまり町にはゆきたくなくて、というのも着てゆく服がなくてさ……」
　そういうとバアさんは恥ずかしそうに身をすくめ、みじめな感じをあらわしたが、たしかに手も足もドロドロによごれ、服もまたボロボロにやぶれ、おまけにこんな素敵にうつくしい果樹園のなかにうずくまっているんだもんなあ。しかも、いったいだれがこんなところで莫須有先生にでくわすなんてことを想像できる？
「まったく乞食みたいなもんさ」
　莫須有先生のほうをみようともせずに溜息をつくと、バアさんは膝をかかえてしゃがみながら、頭上のアンズをみあげ、そのひとつひとつをながめる。
「莫須有先生、あんたは気にかけたこともないだろうけど、リンゴが熟してくると、それが木にくっついているさまは、すごくおもしろいんだよ」
「そいつはきっと「みもの」だろうね」
　莫須有先生はぐるりとアンズの林をみわたして、わざと北京の訛りでいってみるが、じつをいうとちゃんと北京訛りになっているかどうか心配で、バアさんのほうをチラッとみやると、バアさんはそれについては可とも否ともいわず、
「あんたら南のほうのミカンはおいしいから、むかしうちの姑がまだ生きていたとき、町にゆくたびにでっかいカゴいっぱいに買ってきたもんだが、ひとをよろこばせるのが好きなひとだったからねえ」
　というとバアさんはいきなりバツがわるそうな顔をし、というのも食いもののことばかりしゃべっているからで、
「ブタ肉にはめったにありつけないけど、まあそれは仕方ないとして、ブタにエサをやるのはひとの役目で、うちの近所には朝から晩までブタの世話でてんてこまいのうちがあって、そりゃもう汚いのなんのって、ところが去年の暮れにいきなり大事にしていたブタが病気で死んじまってさ――あたしたちはリンゴを一個くらい食べたからってバチはあたらないだろ？　いったい田舎者だっていうだけでいじめられなきゃなんないのかい？　あのクソじじい、こっちこそあんなやつ、たかが田舎の果樹園の管理人のくせに、あたしらにあっても挨拶ひとつするでもなく、なんでああも偉そうにできるのかな？　いつだったかうちの亭主があいつに頼みたいことがあってさ、ところがあいつは女房に居留守をつかわせやがったんだよ！　女房っていうのはよいひとで、あんたとおなじ漢族みたいだけど、なんであんなクソじじいと結婚したんだろ！　あたしたちの土地でとれたリンゴだっていうのにたった一個でも食べちゃいけないっていうのかい？」
「まあそうケンカ腰にならないで、吾輩とあなたとでは考えていることがちがうし、吾輩がいま考えているのは帰るのが面倒くさいなあということであって、そのくせどこに帰ればよいのかもわかんなかったりして、なんとかひとつ好運にめぐまれて、風がひゅうと吹いてきて大金持ちの屋敷の庭にまで吹きとばされて、それが二階で刺繍をしているお嬢さまの目にとまり、お嬢さまは召使いをつかわして、吾輩がいったい何者であるかをたずねさせ、そんなふうにして縁がむすばれ、そこで吾輩はながいものやらみじかいものやら、とにかく興味をひくような話をしまくるわけだけど、じつをいうと吾輩はいましも科挙をうけるために都にのぼろうとしているのであって、その道中でつぶさに辛酸をなめさせられ、いまどこにいるのかさえもわからなくなっており、吾輩がつい「おまえさんはだれだ！」と大声でわめいたもんだから召使いはビックリし、あわてて二階にもどってお嬢さまにつたえたところ、こころ優しいお嬢さまは吾輩をひきとどめて世話を焼いてくれ、どんなふうに世話を焼いてくれたかはいわずもがなだとしても、いずれにせよ当座の厄介ごとはこれで片づいたわけで、おかげで吾輩は存分に詩をつくれるっていう寸法だ」
「あたしもあんたにたずねたいことがあるんだけど、莫須有先生、あんたはいったいなにをしているひとなんだい？」
「いきなり拷問みたいな問いかけだね。吾輩はなにをしているひとなのかって？　それが自分でもわからんのですよ」
「もしなにか困っていることがあるのなら、もう日も暮れてきたことだし、うちに泊まってもいいんだけど、もしイヤじゃなければだけどさ――ただし田舎だからあんたの口にあうようなご馳走はなんにもないよ」
「莫須有先生の家主の奥さん、いい加減なことをいっちゃいけない、さっき木のしたにうずくまってなにをしていたのか、とうのむかしにお見通しなのであって――とはいうものの吾輩はもうはや歩きすぎて腹ペコなんだよ」
「莫須有先生、なんであたしが家をひとに貸しているっていうことを知ってるんだい？　だれかがしゃ

べってるのを小耳にはさんだの？　あんたはホントにこの田舎で暮らしてみたいとおもってるのかい？　だったらおたがい好都合ってもんだよ。うちの家賃はすごく安いし、もし莫須有先生が借りるっていうなら、あたしはいろいろ世話してあげてもいいんだけどさ」

「いろいろ世話するっていっても一日二食だけあてがってくれさえすればよくって、それもどんな食いものでもよくって、どのみちひとはなにかしら食わなきゃなんないわけだからね。ちなみに吾輩は肉が好きだ」

「舌が肥えているんだね」

「たいていのことは口でいうことと身でおこなうことを一致させられなくて、これまで何度となく自炊しようとこころみたんだけど、そのことはまあ日記につけておくとして、まずしい食いもの、とぼしい飲みもの[2]、そんなものをつくるのですらまったくお手上げなわけで、そこそこ金はあるんだけど、なにせ芸術家であるからして――なんの話をしているのかって？　お嬢さまはすごくホメてくれたんだけどなあ」

「お嬢さまはすごくホメてくれた？　へえ、そりゃあ気だてのよい娘さんだったんだろうねえ、あたしもきっとホレちゃうかもね。そう、あたしだって莫須有先生、べつにお世辞をいってるわけじゃないんだよ。ところで芸術家って、それってどういうひと？　さっぱりわかんないね」

「たぶんこの世にあって生きていて、なにか楽しいことがあったら、それを文章であらわせるひとだろうね」

「莫須有先生、だったら願ったり叶ったり、あたしんちの庭はそりゃあもうキレイなんだから、きっとよい文章がつくれるにちがいないよ」

「吾輩の書いた文章を売れば金になるよ」

「だったら願ったり叶ったり、どんな文章なのかしら？　うちのジイさんも文章を書くひとだったけど、あたしがみんなマッチと交換してやったのさ！」

「なんだってよい、ちょうど吾輩がこの果樹園にはいってきてから、目に見えるもの、耳に聞こえるもの、すべてが文章になる」

「莫須有先生」

「なに？」

「あのことなんだけど……」

「なに？」

「恥ずかしいからさ」

「ああ、わかってる、わかってる――劉バアさんが大観園のなかでオシッコをしたっていうことは書かないでくれっていうんだろ？　わかってる、わかってる」

第四章　莫須有先生は名をよばれたくない

莫須有先生はながらく住まわせてもらうことになる家主の奥さんのあとにくっついてゆきながら、こころのなかが妙にモヤモヤしていて、それがなぜだかはよくわからないんだけど、なんとなく自分で自分のことをからかっているような気がするからのようであって、ところで西の山に落ちてゆくお日さまはというと、キミにむかって挨拶しているかのようだが、べつにキミといっしょに遊ぼうなんていうつもりはなくて、ただ明日もまた東のほうからのぼるよといっているだけなのである。それはそうとキミはたまたまゆきずりのひとに身をおちつけるところを提供されたわけで、ここにおいてキミはまったくの漂泊者になりはてたといってよろしい。それにくわえて、生きてゆくということは責任がのしかかってくるということであり、キミがひと休みしたいとおもうそのつど、その重みがいっぺんにドッとのしかかってきて、そいつに素手でたちむかおうとしたところで、もともと千斤の重さをになうべきだったとしても、見ず知らずの子どもとでくわして、おじさんはどこからやってきたのとわらいかけられるのが関の山なのである[1]。といったようなことは莫須有先生にとってはどうでもよくて、かれが気にかけているのは自分がコソ泥のようにみえはせんかということで、そんなふうなもんだから家主の奥さんのあとにくっついてゆきながらイヌに吠えかけられはせんかと心配しているのである。

「ええっと、家主の奥さん、ひとという生きものはひとりよがりなところがあって、けっして自分はひとからわらわれるようなものじゃないとおもいがちで、どんなに日暮れて道遠しといったテイタラクであろうとも、過去のひとにあうことはできないし未来のひとにあうこともできないという気概をもっていて[2]、ひとりっきりでポツンとたたずむこともできるんだけど、そのくせこころのなかは悲しみでいっぱいだったりす

1　偃鼠は河に飲むも腹を満たすに過ぎず（偃鼠飲河、不過満腹）『荘子』逍遥遊

2　子曰く、賢なるかな回や。一箪の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は其の憂いに堪えず。　回や其の楽しみを改めず。賢なるかな回や（子曰、賢哉回也。一箪食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂。回也不改其楽。賢哉回也）『論語』雍也

るのですよ」
「莫須有先生、ひとをバカにしてくれちゃ困るんだけど、われわれ老夫婦はっていうと、しごくまっとうに生きてきていて、ひとを罪におとしいれるようなマネをしたことはないし、ちょうど莫須有先生はあたしらに家を借りるわけだけど、月々ちゃんといただくべき家賃はいただくんだから、だれからもうしろ指をさされたりする筋合いはないし、だれにも安心な暮らしをジャマされる気づかいもなくって、ものを盗まれたり、ケンカを売られたり、そういうイヤな目にあうことはないっていうことは保証するよ」
「ケンカがどうこうなんていうことはてんで気にしちゃいなくて、むしろあなたたちバアさん連中が口論するのを見物したいくらいだが――われわれはどうも話がさっぱり噛みあっていなくて、吾輩がいいたいのはあっちで、あなたがいいたいのはこっちのようだね」
「あんたの話はべつにわかりにくくはないんだけど、ただちょっと湖北の訛りがあるみたいで――そうそう、そういえば、あたしは武昌に七八年いたことがあって、というのも父親がそのころ湖北で役人をしていたんだよ」
「だったら武昌のどこに住んでいたの？　いやその、ただちょっと口にしてみただけかもしれないけど、あなたにあの町のありさまを描いてほしくて、というのも吾輩はあそこで生まれそだったというわけでこそないものの、ながいあいだあそこで学校にかよったんだから、あの町はもう隅から隅まで歩きつくしたっけ。もういっぺん歩きまわってみたいなあ。吾輩のおさないころの友だちはあそこで生きて死んでいったわけだが、かれらはみんな時代の犠牲者であって、だからなんていうか、あの町って、吾輩の記憶のなかではなにがなんだかわからないくらいゴチャゴチャになっていて、屠殺場といい、市場といい、あそこにいるひとりひとりがみんな顔なじみなんだ。吾輩はけっして懐古主義者ではないつもりなんだけどね」
「着いたよ」
　バアさんはそういうと、からだのむきをかえて礼儀ただしくほほえみ、莫須有先生のほうをまっすぐにむく。莫須有先生もまた両手を腰にあててまっすぐに立っているさまは、まるで地球のうえを歩きまわったあげくに終点にたどりついたかのようで、そんなふうにして立っているのは、ひどく滑稽である。
「莫須有先生、おはいりなさいな」
　莫須有先生はなかにはいろうともせず、ただもうひたすら風景をながめつづけており、その笑顔ときたら世界でいちばんの笑顔といってよく、まさに一幅の絵のようである。
「ここにこうして立っているだけで吾輩はじつにもう最高に豊かな気分になれる」
「もし涼みたいとおもえば、そこの石のうえにでもすわっていれば、あたしはお茶をいれてくるから、そんなバカみたいな顔をしていないで、なんだか気の毒になってくるよ」
　バアさんはちょっとイラッときたらしく、眉間にシワをよせたけれども、すぐにおだやかな顔つきになり、莫須有先生のほうにキッチリとむきなおると、いつくしみぶかい母の手のなかの糸は、旅だつ息子のための着物をぬっている[3]、といった風情でもって莫須有先生のかわいそうなくらい骨と皮ばかりに痩せこけたありさまをみやる。
「あらあら、莫須有先生、その首のところにどうしてそんなに傷あとがあるんだい？」
「むかしのことはいわないほうがよいとはおもうけど、吾輩はじつは九死に一生を得たことがあって――われわれの会話はすこぶるボンヤリしていて、たんに言葉づらだけをたどっているだけだと、ややもすれば吾輩はあの例の紅槍会の一味かなんかで、首斬り役人がこの首を斬りそこねたんじゃないかっていうふうに疑われかねないね。そんなんじゃなくて、吾輩はもともと武張ったことが性に合わなくて、おとなしくすわって考えごとをしているほうが好きなんだ。ちょくちょく大病をわずらって、しょっちゅう死にそうになったんだよ」
「おやまあ、こんなに好いひとなのに、ずいぶん苦労したんだねえ」
「医者のところに病気があつまってくるようなもんで、あんまり買いかぶってもらいたくないし、そもそも吾輩はちっとも好いひとなんかじゃないし――ところでたずねたいことがあるんだけど、吾輩のうちの玄関のところのエンジュの木は植えてからどれくらいになるの？　かなりの歳月になるでしょ」
「あんたのうちの玄関だって！　あんたのうちの玄関だったらどうしてあんたが知らないわけ？　あたしゃまだあんたから家賃をもらってもいないっていうのにあたしんちはもうあんたのものになっちまったとでもいうのかい！」
「またそんなふうにいって、あなたは金にこだわりすぎだよ。そんなふうだともう口をきかないよ。あんまり吾輩をガッカリさせないでほしいな。吾輩がいいた

かったのはただこの四本のエンジュの木がなかなか立派なのに感心させられたっていうだけのことさ――吾輩はつねづねおもっているんだが、いまどきのひとは木を植えるなんていう発想はこれっぽっちももちあわせていないんじゃないかと危惧していて、そりゃあもう目先のことばっかりだからね」

「気にしない、気にしない、さっきのはちょいとグチをこぼしてみただけで、さあ遠慮なくはいってちょうだいな」

　そういいながら手をにぎってひっぱらんばかりにしたのは、莫須有先生がどこかに消えてしまうのをおそれたからで、むかしの仙人みたいに黄色い鶴にのってどこかに飛んでいっちまったりしようもんなら、バアさんの部屋は空いたままっていうことになってしまう。莫須有先生はすたすたと大股で部屋にはいってゆき、というのもなんとなくムカついていたし、それにちょっとお腹もすいていた。ところが、いざ部屋にはいってみると、ひとりの娘が――こりゃまたいったい？　むこうのガラス窓から顔をだしてこっちをのぞいているじゃないか！　オンドルにのっかってなにやら仕事をしていたらしい。莫須有先生にみえたのは娘の頭のてっぺん、それに髪の毛のさきっちょのほうだけで、それもすぐに消えてしまったので、莫須有先生は立ちつくしたまま、なにやら詩めいたものを口ずさむ。

「あの庭はずいぶん奥ゆきがありそうだけれども深さはどれくらいかしらん[4]？　ねえおバアさん、いったいこの世界というものはあのガラス窓といっしょのようではあっても空虚なカラッポというわけでもないよね。吾輩はいつだってひとりでぶらぶら歩きまわるのが好きなだけであって、だれかの家のまえをとおりかかっても、まず絶対に家のなかにはいっていったりはしなくて、というのも家のなかにはきっとだれかがいるっていうことを知っているからなんだよね。まあそれもこれも万事うまくいっているときの話であって、そうじゃないときは吾輩はたちまち身も心もくらくらしてきて、もう居ても立ってもいられなくなってしまうんだ。天にまします親父どの、いつになったらせがれを平安の地によんでくださるのやら、もう吾輩を苦しめんでください」

「いま腰かけをもってくるから、いっしょに庭ですわりましょうね」

　奥さんはそういうと満足げにうなづき、腰かけをとりにゆく。莫須有先生はちょっとホッとすくわれたような気分になって、おもむろにチョロチョロとうごきはじめ、ちっちゃいネズミみたいに、ちょこっと頭をのぞかせてキョロキョロとあたりをみまわしたりしていると、むこうのほうからはヒソヒソとささやきあうようなひどくききとりにくい声がきこえてきて、ときおり「莫須有先生」といっているのもきこえてきたりして、あるときは疑問符がついたり、あるときは感嘆符がついたりしていて、めずらしいわねえ、なんでまたこんなところに？　最後のセリフはまったくもって娘っぽい声ではなくて、ようやくのことで腰かけもやってくると、なんとまあ背中にびっしょり汗をかきながら

「このひとはうちの部屋を借りることになったんだから――ねえ、あとでちゃんと挨拶においでよ」

　娘はどうやら片づけでもしているらしく、まったく物音ひとつたてない。

「莫須有先生、うちの庭はなかなかのもんだろ？　ナツメの木が全部で七本あるんだけどね――さあさあ腰をおろしなさいな」

「吾輩の名はあんまり評判がよろしくなくて、かつてある友人にひどくケナされたことがあって、ひとの値打ちはべつに名できまるわけじゃないけれども、とはいえ顔をあわせるまえのときには名っていうやつは神秘的なはたらきをするもんで、じっさい吾輩は天上から下界までいろんなところをさまよってきたけど、どこでも名ってやつは音楽のようにっていうか、すばらしく耳に響くものなのであって、だから「莫須有先生」という名だけでは絶対にあらわしきれないものがあるのであって――要するにどんなときでも吾輩の名はけっして口にしないでいただきたい、どんなときでも！」

「だったら書斎のなかにひっこんで、そのまま十年間くらいひきこもっているがいいさ！　いったい名前をよんだくらいでなにがわるいっていうんだい？」

　そういってバアさんは口をとがらせる。莫須有先生もまた口をとがらせる。うまい具合に頭のうえからナツメの実がひとつ、ポンという音をたてて地べたに落っこちてきたので、莫須有先生はうえのほうに頭をむけると、なにげない口調で

「アンズの実がなる季節のはずなのになんでまたあなたの庭ではナツメの実がなっているのかな？」

「どうやらこのナツメの実とうちの家族の暮らしぶりとのあいだには関係があるらしくて、いまもあんたはちょっと精神的に傷ついたみたいだから、どういうわけかはわからないけれどもこういうふうなことが起こるんだよ。うちには七本の木があって、ほらごらんな

さいな、去年なんか百五十斤の実を売ったんだけど、あたしも二十斤ほど干したもんさ――あとで姪っ子がもってくるとおもうけど、おいしそうなのを皿にのっけてくるようにいっておいたから、莫須有先生にもうちの田舎の名物を味わってもらわなきゃね」

というそばから姪っ子があらわれてきて、またそのあらわれかたが素早いのなんのって――ひょっとしてドアのすきまからこっちをのぞいていたんじゃないの？　ものすごい勢いでやってきたもんだから、つまづいて転びそうになって、ドアの敷居をまたぐときには足が地についておらず、莫須有先生はすぐさま起ちあがると

「お嬢さん、ビックリさせないでおくれ」

お嬢さんはとっくのむかしに顔をうつむけていて、靴をはこうとして踵がやぶけちゃったというふうなたたずまいで、それをみた莫須有先生があわててホメていうには

「お嬢さん、ちっとも恥ずかしがることなんてなくて、吾輩が町のほうからやってきたからといって、なんにも緊張することはないんだし、明日またかわいい靴をあつらえればよいだけのことで、そもそも纏足していない足はかわいいし――それにキミは知らないとおもうけど、われわれの暮らしぶりは「オンドルのうえでウロチョロする」といった具合なのさ！　ただ勘ちがいしないでほしいんだけど、われわれのほうにはじつはオンドルなるものはなくて、キミのような娘さんがオンドルのうえにすわって仕事をしたり雑談をしたりするっていうのが吾輩にはうらやましいっていうだけのことで、世間のことになんにもわずらわされず、ガラス窓をへだててながめるているっていうのは愉快だろうね」

娘はいきなり起ちあがると、顔を真っ赤にして、横目で「おばさん」のほうをジロリとにらみつけ、きつい声で

「なんでよびつけたりしたの！」

そしてナツメをのせた皿をポイとほうりだして去ってゆく。莫須有先生はというとカラスもスズメも鳴き声ひとつたてないといったふうにたたずんでいたが、世のなかにはどうしようもないこともあるわけで、やれやれと腰をおろす。

「家主の奥さん、吾輩はなにか失礼なことをいったかなあ」

ところが家主の奥さんはというと口をとがらせて部屋のなかのほうにむかって

「あたしがよびつけたって！　なんでまたあわてふためいて部屋にもどっちまったりしたの？　なにをビクついてるんだい？　ひとさまに礼儀知らずとわらわれちまうじゃないか！」

というと莫須有先生のご機嫌をとるようにして

「莫須有先生、かわいそうに、あの子は今年で十六になるんだけど、みっつのときに父親が死んでからというもの、母親はあの子を甘やかし放題に甘やかしてそだててきたもんだからあんなふになっちまったけど、あたしがいないときにはあの子に世話をさせるからね。あんまり叱らないでやっておくれ」

莫須有先生はナツメがのっかっている皿をみつめ、そのまま頭をあげようとしない。

「なんだか吾輩はちっともお腹がすいていなくなってしまったみたいで、このナツメはとてもきれいな赤い色をしているから、このまま地べたに散らばらせておいてほしいんだけど、そのうち月がのぼってくるだろうからさ」

「そんなふうにいうならそうするけど――だいたい莫須有先生っていうひとは――なんでいうかえらくインテリなわけで、あたしら田舎者がそんなふうにしようものなら、きっとケチなせいでそんなふうにするとおもわれて、食べさせもせずにナツメを散らばらせただけだとおもわれちまうよ」

「あなたというひとはつくづく現実的なひとだねえ！

そんなことばっかりいうようだと、われわれの間柄もおかしくなってしまうし、吾輩のこの文章だって今日のうちに提出できなくなってしまいかねなくて――あなたが夏の日というのがどれだけながいとおもっているのかは知らないけど、われわれはいつからこうやってしゃべりつづけているとおもってるの？　おまけにしゃべっていることといえば中身のない話ばっかり。いったい吾輩はどうすればよいのかなあ。やれやれ、そういえば親父がしょっちゅう吾輩がこんなふうになるのを心配していたっけ」

莫須有先生はいきなりガックリとうなだれ、ものすごく申しわけないといった雰囲気につつまれ、それはまるで魂がどうかなってしまったみたいで、きっと深

1　児童相見て相識らず、笑い問う客何れの処従り来ると（児童相見不相識　笑問客従何処来）賀知章「回郷偶書」

2　前に古人を見ず、後に来者を見ず（前不見古人、後不見来者）陳子昂「登幽州台歌」

3　慈母　手中の線　遊子　身上の衣（慈母手中線　遊子身上衣）孟郊「遊子吟」

4　庭院深深として深きこと幾許ぞ（庭院深深深幾許）欧陽脩「蝶恋花」

刻な危機に見舞われちまうにちがいなさそうである。その危機はっていうと世間でいうところの経済的な困窮よりもすごいものだったりして。

それからどうなったのかという事情はなんにもわかっていなくて、ただどうやら莫須有先生はこの部屋のことが気に入ったらしく、明明後日に引越してくるといい、翌朝はニワトリが鳴くころに起きだして、車にのって町にゆき、明後日にはいよいよ田舎にやってくるというはこびになったということがわかっているだけである。

第五章　莫須有先生は帽子をみる

明日のつもりだったんだけど、莫須有先生は今日のうちに引越してしまおうとおもいたち、やおら田舎をめざした。なにごとであれこんなふうにバタバタしてしまうところに、かれの修養が足りないことがみてとれる。かれは四本のエンジュの木のところまでくると、いよいよ着いたという気になって、それはまるでホームシックにかかった幽霊が「望郷台」という三文字を目にしたとでもいうふうに[1]、とたんに泣きたくなり、その木をみあげながら

「これだこれだ、そうともそうとも」

樹影はどこまでも濃いけれども、あたりは寂として声なく、まるっきりなんの気配もないので、しょうがないから前進あるのみというふうな按配になり、ようやく玄関にまでたどりつくと、ドアをたたく。たたけどもたたけども返事がない。隅っこのほうにいって背中をもたれかけさせながら溜息をつき

「やれやれ、だれかを好きになったのに恋にやぶれてしまうっていうのは、こんなふうに足場がくずれおちてしまって、世間のひとびとから捨てられてしまったような感じになるんだろうなあ。それにしても吾輩はなんでまたこんなに悲嘆に暮れているんだ？　世間のひとびとよ、もしあなたたちが愛の春風につつまれて一日をすごしたことがないならば、あなたたちにかわって吾輩が悲嘆に暮れてあげよう。その切なさたるやこころを掻きむしるようではある。いったい人生というのはなんとおもしろいものであろうか」

なんてこったい、わけのわからんことを口走ったりして、ぼくはどうやら書きつづけることもできなくなってきたが、ぼくはどうやら串刺しにされちゃったんじゃないだろうか！　やっこさんの惨めなすがたをみるにつけ、まったくもって勝利者というにはほど遠く、さすがのぼくも同情の涙を禁じえない。どうやらぼくは胸中にわだかまりがあるみたいで、こうなっては仕方がないからさっさと昼寝をすることにしたいが、いましがた目をさましたばかりだもんで、頭がボンヤリしている。そのくせぼくは本をせっせと書き写したりしていったいどうしようっていうんだろう？　まあよい、なにもいうまい。なにごとであれボンヤリしているというのがいちばんおもしろいのであって、カッコをつけていうならばそれはまさに神秘という二文字なのであって、なんの役にもたたないひとをあとでビックリさせてやろう。

莫須有先生は大声でさけびだし

「この村の連中はどいつもこいつも眠りこけておるのか？　なんでこんなに静かなんだ？」

「だれだい？」

「吾輩だ！　吾輩は今日やってきたんだ！」

「吾輩って、いったいだれなの？」

「莫須有先生だけど、まさか忘れたってことはないよね？　吾輩はじっくり半日くらい思案して、ついに今日のうちに引越そうとおもいついてしまったわけで、あなたも一日はやければ一日ぶんたくさんの家賃をもらえるんだから、きっと吾輩のことを歓迎せずにはおれんだろう」

「おやまあ、もう引越してきちゃたとは、なんてあわてんぼうさんなの！　どうしたものかしら？」

どうしたものかということについて、莫須有先生の家主の奥さんになんのアイデアも浮かぶはずもなく、頭のなかはカラッポで、あやうく拍手をしそうになりながら、「どうしたものかしら」とオロオロするばかりなのは、ついさっきまで二十斤の石炭をはこんでいて、ちょうど「顔をあらおう」としようとしていたところで、まえの日に公園であったときに身につけていた青いシャツはもう着ていないけど、身体髪膚は之を父母に受く[2]、からだが老いさらばえているのはいかんともしがたい。それはともかくとしても、莫須有先生はてっきり明日くるもんだとばかりおもっていて、すっかりそのつもりでいたもんだから、明日の朝はやく起きて部屋をキレイにしておこうとおもっていたのに、とんでもなくキレイじゃないっていうほどでこそないけれども、なんとなく申しわけないような感じもあるし、それに昨日の朝はやくに夏用の木綿のシャツを長持からひっぱりだして、それを明日は着ようとおもっていたわけで、門を出でては大賓を見るが如くといふうにおでむかえしようとおもっていたっていうのに[3]、なんでまた今日やってきちゃったの？　ひとは追いつめられるとよいアイデアが浮かんでくるもん

で、そうそう莫須有先生をしばらく待たせておけばよいんだっていうことに気がついて、大きな声でさけぶ。
「莫須有先生、そのまま待っててておくれ」
　莫須有先生はそのまま待った。しかしながら莫須有先生はなにぶん好奇心のかたまりだから、おとなしく待ちつづけるなんていうのは無理なことであって、ものの五分もたたないうちにガマンできなくなり、ドアのすきまからこっそりのぞきこんだのだが、そのありさまときたらまるで木にのぼりたがっているキツネみたいである。
「そこでなにをしているのかな？」
「まったくもうなんてガキっぽいんだい！　そのまま待っててておくれといったら待っててておくれよ！　いまちょうど顔をあらっているんだから」
　そとにいるもんでどうにもならず、ちょっと首をすくめると、なんとなく怒ったような感じで
「吾輩がガキっぽいって？」
　こうなったらもう怒るからには怒ってしまおうとばかり
「じゃあ顔をあらえば！　それってネコの顔あらいじゃんか！　なんで吾輩の悪口をいうの？　まったくなんてクソババアだろう！　ネコが顔をあらうと客があるっていうのは、吾輩のふるさとにつたわるいいつたえなのだよ」
　文章というものにはこういうふうに屈折がつきもので、莫須有先生もこれはおわらいぐさだと感じたのか、じっさいわらいながら、
「ながいつきあいになるだろうっていうのに、はなからケンカをしちゃうなんて、いったいどういうこと？」
　もともと田舎にやってきたのは一念発起してなにかやってやろうとおもったからである。クルリと背中をまわして木のほうをむくと、木のなかでジージーと鳴いているものがいったいどの枝にかくれているのかをしらべはじめる。
「おやまあこの虫はおもしろいね、みつからないように葉っぱにかくれているよ」
　いつのまにやら、ビックリさせるくらいひっそりと、なんの音も臭いもなくドアがひらいたかとおもうと、いかめしく身なりをただしたバアさんが満面の笑みをたたえながら部屋のなかから「ようこそ莫須有先生」と声をかける。莫須有先生はとっさに五官をフルにはたらかせようとこころみたが、なんとなく頭が真っ白になってしまい、あやうく無礼なことをやらかしてしまいそうになり、四百五十本のアンズの木のしたではじめてであったときのことは忘れることにして、「どうしちゃったの今日のいでたちは」というわけにもゆかず、ただ一言「家主の奥さん、こんにちは」とだけいった。
　それからたがいに口をつぐみ、主人とお客とならんで、大廟に入りて事毎に問うといったふうにして[4]、ふたりで半日をすごし、みっつの部屋をめぐり――たしか第一章ではひと部屋と半分といっていなかったっけ？　それは莫須有先生の住まいはみすぼらしいということを強調したいがために、いきおい大袈裟にいわざるをえなかったのであって、じつは部屋はみっつあり、みっつの部屋にはおびただしい骨董品がならべられていて、莫須有先生はというともうホメたたえたくて辛抱たまらず、声をひそめてうやうやしくへりくだると、しきりに頭をふってみせたが、それは世間のことなど信じたりしないということであり、またもう二度と田舎をはなれるつもりはないといったのは、うやうやしくお辞儀をしてみせるということであり、こんなふうにいうのであった。
「家主の奥さん、吾輩はまったくもってこころから感服つかまつった。食うにも事欠くありさまであるにもかかわらず、かくも優雅きわまりない暮らしぶりであるとは、なんていうか古ぼけた夏のシャツに、すばらしく素敵な銅のボタンをくっつけて、そのことを気に病みもしないあたり、いやもう莫須有先生にいわせれば理想のありかたであって、まったく世のなかは捨てたもんじゃないねえ」
「とりあえず自分の荷物を片づけておくれ」
「ひとつお願いしたいのだが今日はもう文句をぶつくさいわないで、こうなってしまったからには吾輩は責任をもってやるし、こうなってしまったからには吾輩はここで寝泊まりするわけで、なにからなにまで吾輩の流儀で片づけさせてほしい」
「なにいってるの、いいからいいから」
「ここにあるものはどれもこれも、てんで役にたちそうもないねえ」
「使えるものがあれば置いておくし、使えないものは片づけるから――この筆置きと硯とはお気に召さない？　うちの旦那がむかし鳳凰城からせしめてきたものらしいんだけど」
「鳳凰城、その名をきいただけでグッとくるよ。このふたつのものはじつに興味ぶかいね。でもちょっと目にすればもうよくて、じっさい使うとなれば使いなれたもののほうがよいし、それに吾輩はいつも自分のものを携帯している――ところでこの箱のなかにはなにがあるの？」

「帽子をいれた箱だけど、うちの父親がむかしかぶっていたクジャクの羽根飾りつきの帽子がはいっているんだけど、よければ莫須有先生のお目にかけましょうかね」
「こいつはすごい、ものごころついてからずっと忘れはてていたが、あなたがみせてくれたおかげで、たしか子どものころに吾輩の叔父さんの頭のうえにもこんな帽子がのっかっていたのをおもいだして、吾輩はそれを非常に気に入っていたのに、そういえば叔父さんにそれで遊ばせてちょうだいといいだせなかったっけなあ。どうしてだかはわからなかったけど、この帽子でだけは絶対に遊ばせてもらえないんだって子どもごころにもわかっていたんだ」
「ちょっとみてごらん――あらまあ、こりゃもう使えそうもないねえ」
「まあそうガッカリすることもないんじゃない？　だって時代がかわってしまったんだから」
　莫須有先生はそのクジャクの羽根飾りつきの帽子をみて、それがかれの叔父さんのかぶっていたクジャクの羽根飾りつきの帽子よりもはるかに立派であることに気がつき、そして子どものころにあこがれたクジャクの羽根飾りつきの帽子には、いまとなってはもうお目にかかれないわけで、あのころは楽しかったなあ――あなたまで感傷的になることはないんじゃない？
　あなたは骨董品をいじって楽しんでいればよいのだから。
「おバアさん、子どものころに好きだったものって、いまでもハッキリとおぼえているもんで、どうしてそうなのかはさっぱりわからないんだけど、これってちょうど橋をわたるのが大好きなんだけど、そのくせちょっと怖かったりするようなもので、ちっちゃい子どもの影法師が橋のうえにあるのに、かれの魂はっていうと、あれは吾輩なのかそれとも吾輩ではないのか、この世のことなのかこの世のことじゃないのか、それはもう吾輩の画家としての才能をもってしてはとうてい描くことのできないものであって」
　バアさんのほうはというと独り言をつぶやいており、なにをブツブツいっているのかはわからないが、莫須有先生はどういうわけかいきなりふんぞりかえって、バアさんなんかになんにも興味はないというふうにしていたかとおもうと、しばらくしてしゃべりはじめる。
「麒麟と地をはしる獣とはなかまだし、鳳凰と空をとぶ鳥ともいっしょで[5]、ネコがネズミをつかまえ、ネズミがネズミの芝居をするっていうのは、吾輩はどれもみんな好きなんだけど、吾輩がいちばん好きでないのは羽根飾りつきの帽子にもちいられるクジャクで、みえるのはただクジャクの羽根だけであって、肝腎のクジャクの生命はまったくみあたらず、おもしろくもなんともなくて、だからどこかの公園でだれかがクジャクをながめているのをみたら、吾輩はそういう手合いはまったく見込みなしだとおもうんだ」
「莫須有先生、あんたっていうひとには同情っていうものがこれっぽっちもないから、あたしがどんなに苦しいかっていうこともわかりっこなくて……」
「ほお――ひとつおたずねしますが、あそこにあるのはだれのもの？」
「どれ？」
「あそこの、ほらあの壁にかかった弓」
「まえにもいったとおもうけど、うちの祖先は皇室をまもるために、ひとりひとり馬に乗ったり弓を射たりする技能をそなえていて、あの弓はね、うちの曾祖父が国境の関所のそとでつかったものだよ」
「そうだったら、あのまま壁にかけておいてもよろしいかな？　吾輩はながめていたいのですが」
「よろしくないわけがないでしょ？」
「わあ、ものすごくうれしいなあ――とある年寄りがいてね[6]、吾輩とたいへん親しいひとなんだけど、実戦でさんざんつかわれた鉄砲を一丁だけかれの鳳凰磚斎の壁にかけておきたいといっていたんだよ。もともと江南水軍の出身だからね」
「その写真立てはどうする？　うちの父親が友だちといっしょに吉林省でとった写真だけど。その老人たちはみんな大酒飲みで、ほらごらん、このひとが父親だよ。雪がふった日なんかは、あずまやに寄りあって酒をくみかわしたらしいよ」
「これは黄岡の竹楼かしらん？　まあ、これはとりはずして、あなたの部屋にかけておいてもらおう。吾輩

1　旧時迷信、謂陰間有望郷台、人死後鬼魂可登台望見陽世家中情況。『辞源』第三版
2　身体髪膚、之を父母に受く。敢えて毀傷せざるは孝の始なり（身体髪膚、受之父母。不敢毀傷、孝之始也）『孝経』開宗明義章第一
3　門を出でては大賓を見るが如く（出門如見大賓）『論語』顔淵
4　大廟に入りて事毎に問う（入大廟毎事問）『論語』郷党
5　麒麟の走獣に於ける、鳳凰の飛鳥に於ける、泰山の丘垤に於ける、河海の行潦に於ける、類なり（麒麟之於走獣、鳳凰之於飛鳥、泰山之於丘垤、河海之於行潦、類也）『孟子』公孫丑上
6　「老漢」は周作人をさす。

のこころにはいっぱい心配事がわだかまっていて、そこのところは賢明なる大家さんにはどうかお察しいただきたい。むかしのひとの、たとえば肖像画とかであれば、もし気に入りさえすれば、ひょっとすると部屋にかざりたくなるかもしれないけど、それは吾輩とまるで関係がないという感じがするものにかぎるのであって、たとえば杏壇において孔子が講義をしている肖像画を一枚もっているけど、それはある友だちがくれたものなんだよね。あるいは母が還暦になったときのこと、吾輩に写真を一枚おくってきたんだけど、そういうのはもう大事にしまっておかざるをえない。まことにお恥ずかしいかぎりだが、吾輩はいつも孤独でありたいというおもいをいだいている。このうちに引越してきて住むというのも、じつをいうと旅館にひっそり泊まるような気分でありたいからであって、おたがい干渉せずに暮らしておれるとおもったからなのだ」

そういいながらもキョロキョロとあたりをみまわし、なにやら自分のことをもてあましているような素振りをしつつ、バアさんに紙を一枚くださいといい、紙をどうするのとバアさんがたずねると、便所にゆきたいのだといい、そしてドアをでて便所のほうにむかったのだが、ひどくあわてふためいて、そのくせなんにもしゃべらないで。とおもったらドアをでるとき、しみじみとつぶやいた。

「話はまだおわっていないから、あとでまたつづきをやりましょう――昨日友だちにさそわれて会賢堂にゆき、かれらはひどく酔払ったけど、吾輩はただご飯を食べただけだったんだもの」

というわけでわれわれもまたあとでつづきをやるということにせざるをえないのである。

（2019、８、１受理）